

と差はなく皮疹、リンパ節腫脹があったが、1名は風疹の既往を主張し薬疹との鑑別も要した。しかし、HI値は両者とも初回8倍以下、2回目128倍と上昇し、風疹と診断されたので中絶を勧めた。

外来患者の年齢分布をみても20代前半の女性の数が少なく予防接種の効果が窺えたが、妊婦2名はその対象外である28歳、30歳で両者とも子供の友人からの感染と考えられた。成人の中でも、特に感染機会の多い、妊娠可能な年齢層の女性の抗体価が低いことに注意しなくてはならない。

#### 5. Prostacyclin (CS-570) にて治療した溶血性尿毒症候群 (HUS) の姉妹例

(腎センター小児科)

○小松 康宏・長田 道夫・川口 洋・  
甲能 深雪・伊藤 克己

HUSは微小血管溶血性貧血、血小板減少、腎不全を三徴とし小児に好発する疾患である。病因、病態は不明な点が多いが、発症に prostacyclin (PGI<sub>2</sub>) の異常が関与しているといわれている。我々はCS 570の投与を行ない症状の改善をみた HUS 姉妹例を経験したので報告する。〈症例1〉1歳女児。下痢、嘔吐、血便が出現後全身状態が徐々に悪化。貧血、意識障害の精査、治療のため入院。Hb 5.5g/dl, 血小板12万/mm<sup>3</sup>, 赤血球破碎(+), BUN 100mg/dl, Cr 7mg/dl, 腎不全の進行に対しCAPD施行。同時にCS 570を16日間持続点滴(50ng/kg/min)し、臨床症状、検査所見の改善をみた。〈症例2〉3歳女児。症例1の姉。症例1の入院翌日より嘔吐出現し、乏尿、血蛋白尿も出現したためHUS疑いで入院。Hb 9g/dl, BUN 55mg/dl, Cr 1.1mg/dl, CS 570持続点滴で症状の改善をみた。HUSに対するPGI<sub>2</sub>投与は未だexperimentalであるが副作用のないことは、HUSの治療法が確立していない現在、重症HUSの治療として試みる価値があると思われる。

#### 6. 耳鳴に対するイオントフォレーゼ法の治験例

(第二病院耳鼻科)

○久田 由子・横内 載子・宮野 良隆・  
三谷 芳美・上原真由美・中山 一美・  
駒崎 陽子・荒牧 元

耳鳴は、耳鼻科のみならず各科においても日常臨床的に認められる。これに対し種々の治療法が試みられているが、難治例も多く認められる。我々は、4%キシロカインを用いた鼓膜麻酔法(イオントフォレーゼ法)を耳鳴患者に対して行ない、有効例を認めたので

報告する。対象例は、昭和61年2月から昭和62年5月の間に当科に耳鳴を訴えて来院した患者のうち、薬物療法、通気療法に反応を認めなかった12症例(♂6名、♀6名)16耳である。方法は、イオントフォレーゼ法(4%キシロカイン1ml+5,000倍ボスミン0.5ml)を週3回10回を1クールとして施行した。

結果は、6例(7耳)において耳鳴の自覚的低下を認めた。今回は、効果判定が患者の自覚症状のみであるので、今後耳鳴検査による客観的規準を設けさらに症例を重ねて検討したい。

#### 7. 両鼻側半盲を呈した Primary Empty Sella の1例について

(神経内科)

○中村 哲夫・佐々木彰一・小林 逸郎  
竹宮 敏子・丸山 勝一

Primary empty sellaにより両鼻側半盲をきたしたと思われる稀な1例を経験したので報告する。症例は63歳女性。理学的小および一般検査所見には異常なく神経学的には両鼻側半盲のみを呈しMRI, Merizamide CTにてEmpty sellaと診断した。内分泌学的には閉経によると思われるLH, FSHの増加以外は下垂体前葉ホルモンは正常範囲内にあった。TRH, LH-RH, GRF負荷試験は正常反応を示したがインシュリン負荷ではGH, Cortisolに低反応が認められた。Empty sellaによる視野障害の型は同名半盲, 水平半盲, 周辺視野狭窄等が報告されているが両鼻側半盲は数例の報告があるのみである。本症例では視交叉のトルコ鞍内陥入により両鼻側半盲がおこった可能性が考えられた。またGRF負荷試験によるGH反応は正常でありインシュリン負荷試験によるGH反応は低反応であった事よりEmpty sellaによるhypothalamusからpituitary stalkにかけてのcompressionの可能性が示唆された。

#### 8. RI lymphographyによる胃リンパ流および胃癌リンパ節転移の検索

(消化器外科)

○太田 重久・鈴木 博孝・鈴木 茂・  
福島 靖彦・喜多村陽一・勝呂 衛・  
山下由起子

(放射線科) 日下部きよ子

目的・対象；遠位リンパ節をも含む胃リンパ流の検索を目的とし、40例の胃癌症例を対象にRI lymphographyを行なった。

方法；手術19~24時間前に胃噴門および幽門部粘膜

下の各々へ経内視鏡的に半減期の異なる2核種 ( $^{99m}\text{Tc-Renium Colloid}$ ,  $^{111}\text{In-Colloid}$ ) を注入し (double isotope method), 術後摘出リンパ節の RI up take (cpm/g) を計測した。

結果;各リンパ節の RI uptake は実際の転移率と相関し, それよりみて上部胃癌では9, 11, 16sin, 下部胃癌では9, 14v, 16dex 16sin が郭清上の重要なポイントとなる。

まとめ;従来より胃リンパ流の検索には点墨法等が行なわれてきたが, これらに比して RI lymphography では, 3・4群等より遠位のリンパ流を定量的に知ることができ, さらに double isotope method を行なえば, 同一症例において異なる部位からのリンパ流を同時に検索することができ, 有効である。

### 9. 悪性褐色細胞腫の1例

(内分泌内科)

○中神百合子・對馬 敏夫・鎮目 和夫

(放射線科) 日下部きよ子

褐色細胞腫は, 副腎髓質・旁神経節などのクロム親和細胞から生じ, 悪性型, 異所性例, 両側副腎原発例, 家族内発生例および小児例が約10%ずつみられることから, 別名10%病と呼ばれている。

今回, われわれは, 異所性かつ悪性型の褐色細胞腫を経験した。患者は47歳の男子で, 昭和54年, 他院にて後腹膜旁神経節腫と診断された。昭和59年再手術時にリンパ節転移は認めないが, 高血圧・血中ノルアドレナリン高値は持続し, 昭和61年10月施行の $^{131}\text{I-MIBG}$ シンチで多発性骨転移を発見された。積極的治療を求めて, 昭和62年2月6日に当科入院時, 持続性

高血圧, 動悸, 腰痛などの諸症状の他に, 肝・骨転移, 心筋症, 僧帽弁閉鎖不全を認め, 血中・尿中ノルアドレナリンも異常高値を示した。本例に対し,  $\alpha$ -ブロッカー・Ca拮抗剤などによる降圧療法に加え, より根治的な治療法についての考察も行なったので, あわせて報告する。

### 10. 耳鼻咽喉科の救急医療の統計

(耳鼻科)

○成田 七美・辻田 直美・石井 哲夫

東京女子医科大学救急医療センター耳鼻咽喉科を受診する患者について, 昭和61年1月1日より同年12月31日までの1年間についての調査を行ない, 昭和57年の統計との比較検討を行なった。

耳鼻咽喉科受診者数は2,078人で女子医大救急センターでは4番目であった。年齢分布は10歳以下が44%と約半数を占めていた。受診者の住居地域は東京都内が93.8%であった。

疾患別では耳疾患が最も多く, 全体の45%を占め, そのうち急性中耳炎が77%を占め, そのうち急性中耳炎が77%を占めていた。2番目に多い疾患は鼻出血で11%を占め, 救急車利用の最も多い疾患である。耳痛疾患, 鼻出血は昭和57年と比較し, 増加傾向であるが, 救急度の高い異物は, 昭和57年より減少傾向にある。

### 特別講演

安らかな死へのデス・エデュケーション—死をタブー視する社会の中で—

(ジャーナリスト立教大学講師) 若林 一美